

氏名	田島千裕
学位の種類	博士(教育学)
学位記番号	甲第172号
学位授与年月日	2013年6月28日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	Japanese Learners of English in a Study Abroad Context: Outcomes, Language Contact, and Proficiency Gain (留学環境における日本人の英語学習者—成果、言語接触、 習熟進度—)
論文審査委員	主査教授 富山真知子 副査教授 守屋靖代 副査教授 ジョン C. マーハ

論文内容の要約

本論文は、短期留学の成果を調査すると共に、参加者の言語接触量や英語の習熟度の差をもたらす諸要因を検証したものである。対象者は、東京都内の私立大学に通う日本人大学生2年生の25名で、英語学習を主目的として、カナダにおける15週間の留学プログラムに参加した者である。以下に挙げる3つの研究課題をたて、検証を行った。研究課題1では、留学の成果を捉えることを目的とし、英語の習熟度と非言語的情意の伸長度を測定した。研究課題2では、帰国後の英語の習熟度を左右する変数、および留学中の言語接触量を左右する変数を検証した。さらに、研究課題3では、質的データを用いて、留学中の言語接触量に関する量的データ分析結果に対し、解釈を加えた。検討した変数には、情意要因の、学習動機、コミュニケーションへの積極性、言語不安、英語への自信、ホームシック度等が含まれる。さらに、学習者個人要因の、過去の留学経験、出発前の英語科目履修数、出発前の言語接触量、英語の習熟度等についても検討した。量的および質的データの分析を含める混合研究法を用いた主な調査結果を、以下に概要する。

研究課題 1 の結果：留学の成果

第一の主な研究結果は、調査を行った全ての領域において、留学の成果が表れたことである。学習者は、出発前よりも留学を終えた帰国後の方が、1) より高い英語の習熟度、2) より高い学習動機、3) より高いコミュニケーションへの積極性、4) より低い言語不安、5) より高い英語への自信を有していた。

研究課題 2 の結果：帰国後の英語の習熟度および留学中の言語接触量に関わる属性

第二の主な研究結果は、帰国後の英語の習熟度と相関する変数についてである。調査をした変数の中で、以下の変数が、帰国後に測定した英語の習熟度と有意な相関を示した。1) 出発前の英語科目履修数、2) 帰国後の学習動機の高さ、3) 帰国後のコミュニケーションへの積極性の3要因である。第一の、出発前の英語科目履修数の結果が示唆するのは、出発前の教室内英語指導が、自然な言語習得環境での習熟を促すための基礎作りに寄与したということである。さらには、第二と第三の、帰国後の学習動機の高さと、帰国後のコミュニケーションへの積極性の高さの結果により、肯定的な情意が、言語学習に必要な肯定的な言動や行動に直接繋がりを、習熟度を伸ばしたことが示唆される。

第三の主な研究結果は、留学中の言語接触量と相関する変数に関するものである。調査した変数の中で、以下の3つが、留学中の言語接触量と相関関係を示した。1) 出発前の英語への自信、2) 留学中のホームシック度（負の相関）、3) 帰国後のコミュニケーションへの積極性、である。

研究課題 3 の結果：留学中の言語接触量に対する質的データによる解釈

質的データ分析では、特に留学中の言語接触量に関する量的データ分析結果に焦点を当て、解釈と説明を加えた。留学中の言語接触量と相関する変数は、出発前の英語への自信と、帰国後のコミュニケーションへの積極性であることは上述の量的結果の通りである。質的データからは、出発前に英語への自信が高かった学習者は、留学先での英語コミュニケーションに対して肯定的な見通しを持っていたことが明らかになった。また、帰国後のコミュニケーションへの積極性が高かった学習者は、留学中に、コミュニケーション問題に対応するさまざまな戦略を持ち、意欲的にコミュニケーション行動を取っていたことも明らかになった。さらに、留学中に言語接触量が多かったことが、帰国後の学習動機やコミュニケーションへの積極性の向上に繋がったことも示された。上述した通り、帰国後のコミュニケーションへの積極性は、帰国後の英語の習熟度とも有意な相関を示したことから、帰国後のコミュニケーションへの積極性は、留学での成果を上げるために最も重要な情意の一つであると言える。

一方で、留学中のホームシック度と留学中の言語接触量には、(負の) 相関があることが示されたことも上述の通りである。加えて、出発前の言語不安と、留学中のホームシック度に有意な相関が見られ、これは、出発前に言語不安度が高かった学習者は、留学中にホームシックになる確率が高いことを示している。出発前に言語不安度が高かった学習者のインタビューや自由回答からは、言語不安、つまり第二言語使用時の心配感は、過去に第二言語を使用した際に感じた恥らい、または、コミュニケーションに参加するために必要な第二言語コミュニケーションスキルの欠落、および内気な性格が原因であることが示された。このような学習者は、誤文を発することを恐れて、ホームステイ先での英語使用を控えることで、コミュニケーション問題を避けていたことも明らかになった。ホームシック度に関しては、海外の新しい環境で体験する数々の困難、例えばなじみの食事、家族、娯楽等の喪失が、ホームシックの症状を肥大させたことが分かった。同時に、予期せぬ困難に遭遇することが、学習者をホームステイ先の自室に閉じこもらせ、日本での生活に思いを馳せる症状の引き金になっていた。質的データにより、言語不安とホームシックの関係、および言語不安とホームシックが英語接触の少なさへと繋がるメカニズムを解明できたと言える。

以上、研究結果からは、実際の英語の習熟度ではなく、出発前の英語への自信や英語不安といった正反対の情意が、留学中の学習者を二分したことが明らかになった。留学中に言語接触量が多く留学で成果を上げることのできた学習者と、一方で、留学中に言語接触の量が少なく留学の成果を上げることのできなかった学習者である。

論文審査結果の要旨

国際化が進み、我が国の国際的競争力を高めるために、政府はグローバルに活躍できる人材の育成が急務として、「グローバル人材育成推進事業」を掲げ、大学にその取組みを促す働きかけをしている。このような背景を考える時、田島千裕氏の本論文は、いわゆる短期海外語学研修などと称されるプログラムの意義を検証するものとして、理論、実践の両面で大きな貢献をする研究報告となっている。

本博士論文の第一に評価すべき点は、その多角性にある。まずは、学問領域の多角性、すなわち学際性である。さらには、方法論的多角性で、研究手法として量的アプローチと質的アプローチを組み合わせた混合研究法を用いている。加えて、理論と実践の両輪を扱う研究であること。すなわち、学問的研究であると同時に、プログラムの運営上においても本研究の成果が生かされることが期待される。

研究の叙述である本論に至る前に、日本における語学研修プログラムの背景や実施形態を類別し、その特徴や短所、長所等が詳細に論じられているが、こうした情報は、研究者のみならず、語学研修プログラムに携わる関係者にとっても大変有用性のある情報であり、実践面で大いに価値があると認められる。

さて、本研究は英語教育、第二言語習得論、異文化コミュニケーション論等を基盤に構築され、その学際性が一つの強みとなっている。日本の大学における英語教育の一環として実施されるプログラムであることを踏まえ、その第一義的な目的である英語習熟度の伸長に焦点を合わせて、第二言語習得論の理論的枠組みや情意的要因を湛然に追っている。また、たとえ、短期であるにせよ、母国を離れ、異国での生活を送る留学であることを踏まえて、異文化間コミュニケーション論の知見もよりどころとしている。

第二言語習得論の大きな研究テーマのひとつは個人要因である。すなわち、母語習得と異なり、第二言語習得においては個人によってその成果には差が出る。本研究においても第二言語習得研究によって明らかになっている諸要因（モチベーション、性格、言語不安、自信、コミュニケーションを取ろうとする意欲等）の検証のみならず、留学という特殊なコンテクストに鑑み、ホームシック度という第二言語習得論では取り上げられることの少ない個人要因を検証し、言語接触量との相関を立証したのは重要な発見と言える。

本研究のもうひとつの強みは方法論にある。量的データの収集、分析を行った後に質的データの収集、分析をし、統合的解釈に至るという「混合研究法」の中でも「順

次的説明的デザイン」と分類される手法を用いている。近年、第二言語習得論においては、第二言語習得という複雑なメカニズムを捉えるために、「複雑系理論」の応用が提唱されているが、その意味で、実証研究において、質的データも取り込んだ混合研究が推奨されている。それを実践した本研究は、方法論において最前線の研究だと言える。

博士論文審査（口頭試問）においては、中間審査での各委員からのフィードバックをどのように受け止め、どのように対処したかの説明の後、委員との質疑応答が活発に行われた。また、委員からは、今後、本研究では実行可能性の観点から修正がきかなかつた点（参加者はほぼ女性であったこと）、すなわち性差要因の追求およびホームシック度要因のさらなる追求等の助言が行われ、田島氏の、短期留学、海外語学研修研究の専門家としての門出が祝福された。

博士論文審査委員会は、2013年5月15日10時10分より11時20分まで、国際基督教大学教育研究棟247号室にて開催され、最終試験および最終審査が実施された。その結果、委員全員の一致を得て、本論文が国際基督教大学大学院教育学研究科における博士（教育学）の学位を授与するに値するものと認めた。